

AELにおける「論理」とは何を意味するのか

——論理的多元主義との整合性を中心として——

近藤雅熙 (Masaki Kondo) ・ 飯田峻斗 (Ryoto Iida)

千葉大学

近年、論理学の哲学のなかで「論理学に関する反例外主義 (Anti-Exceptionalism about Logic, 以下 AEL)」と呼ばれる立場が注目を集めている。AEL は、Quine (1951) の全体論的立場を継承し、端的には、論理学が諸科学のなかで特権的な地位を持つ、という見方 (例外主義) を否定する立場である。AEL の基本的な枠組みは Quine に依拠するものの、現代の AEL は、一般的に Hjortland (2017) により定式化された立場を指す。

AEL を採用するのであれば、科学と論理学は様々な面で連続的であり、特に方法論的な連続性はその代表である。それによれば、科学の理論選択においてアブダクションが中心的な推論形式である以上、論理学の理論選択においても同様にアブダクションが用いられる必要がある、というものである。ゆえに、ここで AEL は複数の論理体系の内でのどの論理体系が最良であるのか、という問題に直面する。これに対応する形で、AEL を採用しつつ、T. Williamson のように古典論理に優位性を認める立場や G. Priest のように非古典論理の優位性を主張する立場 (cf. Hjortland (2017))、さらに AEL を採用する以上、「論理的多元主義 (Logical Pluralism, 以下 LP)」を併せて採用する必要があるとする立場など、複数の対立する立場があり得る。

さて、LP の基本的な主張は次の通りである。すなわち、様々な論理体系における妥当性の基準が共有されたとした場合でも、真理値・矛盾許容性・関連性等の差異に応じて複数の等しく妥当な論理体系が成立し得る、というものである。AEL と LP の関係を巡っては、AEL から LP への自然な帰結関係を主張する (あるいは AEL と LP を一体的に捉えようとする) 見解がある。これらは、AEL の核心である非特権性と評価基準の透明化を強調し、ここから複数の論理体系が合理的に併存可能だとする帰結を導く。具体的には、Hjortland (2017) は AEL の方法論的立場を明確化するとともに、その枠組みの下でのどの論理を支持するかが解釈依存的に分岐し得ることを示し、その上で AEL と LP の接続可能性を認める。また、Martin & Hjortland (2021) は論理的予測主義の観点から、論理体系の優位性が課題に応じて入れ替わり得る理論選択手続きを提示する。

本発表では、AEL と LP の連続性という観点から複数の対立する立場を整理するとともに、その妥当性をそれぞれ評価することを目指す。特に、AEL と LP の関連性を一体的に捉える立場に注目し、その整合的な解釈可能性の検討を通じて、論理学内部における AEL の適用可能性を検証する。

文献表

Hjortland, O. T. (2017), Anti-Exceptionalism about Logic, *Philosophical Studies*, Vol. 174, No. 3, 631-658

Martin, B. J. L. & Hjortland, O. T. (2021), Logical Predictivism, *Journal of Philosophical Logic*, Vol. 50, No. 2, 285-318

Quine, W. V. O. (1951), Two Dogmas of Empiricism, *The Philosophical Review*, Vol. 60, No. 1, 20-43